

皆さんは「いどべい【井戸堀】」という言葉をご存知でしょうか。昔の政治家について言われていた言葉で、政治活動の資金を作るために屋敷までも人手にわたり、井戸と堀しか残らないこと。政治には金がかかることのたとえ、ということになっています。政治家は自分の私財を投じて仕事をしているということで、そのため、代議士は1代限りになったものです。ところが戦後は、世襲議員が増えて、新しく政治家になるのは大変。政治家は私腹を肥やしている、という批判が現在は多いのです。そしてそれは聖書の時代にもしばしば批判されていたことのようにです。その話をします。

今日の福音書は、5つのパンと2匹の魚で、男だけでも5000人の人が養われた、有名な奇跡物語です。この奇跡物語については、今年の3月10日にも、ヨハネの福音書の方で読みました。しかし、今日は奇跡そのものではなく、この出来事が起きる時のいきさつ。特に34節の、「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」という表現がありますが、そのことを政治家との関係で考えたいのです。

先週はイエス様が12弟子たちを伝道に派遣するお話でしたが、今日の福音書では弟子たちがその活動から帰ってきて、報告し合うところから始まります。どんなことがあったか、報告し合ったのでしょうか。ところが、そんな弟子たちを囲んで、大勢の人たちがやってくるので、彼らは食事をする暇もなかったようです。弟子たちの活動が魅力的だったのか、あるいは、彼らの先生であるイエス様に会いたい、と思ったのか。大勢の人から注目されていたのでしょうか。

このような時、イエス様自身も、人里離れたところへ行かれたのですが、弟子たちにも、人々から離れて、休養することを勧められています。そして、また舟に乗って群衆から離れて行かれました。

ところが、イエス様たちが舟で出かけるのを見た人々は、その舟が着くところに先回りして、イエス様たちが舟から上がった時には、大群衆になっていたのです。それを見た時のイエス様の心境が、「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」ということになるのです。

どうしてこの大群衆には、飼い主がいないのでしょうか？そもそも飼い主とは何を指すのでしょうか。

イエス様が生まれるより600年ぐらい前、東の国バビロニアに連れ去られた預言者の中にエゼキエルという人がいました。この人は祖国イスラエルが最終的にバビロニアに滅ぼされることを預言していました。神様の羊であるイスラエルの人々の世話を、国の指導者である牧者（羊飼い）に託しておいたのに、指導者たちは、その仕事をせず、自分のせわをすることばかり考えていた、というわけです。

エゼキエルの預言を読んでみましょう。

エゼキエル34：7『34:7 それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。 34:8 わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。 34:9 それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。

34:10 主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。 34:11 まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。』

羊を飼う遊牧民であるイスラエルの人々にとって、国民と国の指導者は、羊と羊の飼い主の関係にあるのでしょうか。ところが、国の指導者が、国民のことを考えるのではなく、自分の事ばかり考えるようになっている、無政府状態を表現するのに、「飼い主のいない羊たち」という使い方をするようになったようです。その有様を見た神様は、御自分が直接、群れの世話をする、とおっしゃるのです。

そのことは、有名な詩編 23 編などに歌われて、私たちのよく知っている言葉です。

「主はわたしの牧者、わたしは乏しいことがない」という、人々を暖かく見守る神様のイメージです。

イエス様に会おうと押しかけて、先回りした人々は、きっと病気を抱えたり、人々から嫌われるような仕事についている人々だったのではないのでしょうか。このような人々は、神様の救いからは遠い、救われない人々として、当時の指導者たちからは見離されていたのだらうと思います。

しかし、イエス様は、600年前にエゼキエルの口を通して神様が語られたように、そんな苦しい生活をしている人々に同情し、その人たちのために、自分にできることをすべて行おうと尽くされました。「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、」と言われるのは、他の人の痛み苦しみが、自分のお腹で感じることを意味している愛の表現です。

ですから、彼らを教える説教が済むと、「さあ解散しなさい」とはとても言えませんでした。

「羊」というのは、自分ひとりでは、道を正しく歩めない、弱い存在だったのです。だから指導する羊飼いが必要になります。イエス様は、その「飼い主のいない羊たち」のために、直接何らかの援助をしなさい、と弟子たちに命じられたのでしょうか。それが、援助を受ける群衆には、とてもありがたいことだったので、「みどりの野に伏させ、いこいのみぎわに伴われる」豊かな食事を与えてくださる、神様のように感じて、やがてこれは奇跡物語として、どの福音書にも書かれるようになったのだらうと思います。そして、私はヤコブの手紙を思い出します。こんな言葉です。

◆行いを欠く信仰は死んだもの

『 2:14 わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。 2:15 もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、 2:16 あなたがたのだけれが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。 2:17 信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。』

先週の福音書は、イエス様が弟子たちを伝道に派遣したところでしたし、今日のところでは、イエス様が、空腹な大群衆を見て、弟子たちに「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と言われました。

私は11年くらい前から、漬け物を漬けたりしていますが、やはり伝道するには、イエス様が言われるように、人々に食べ物を与えることが大切なのではないか、と思っています。それは、ただ空腹を満たすための口から入る食物だけではありません。

エゼキエルより少し前の時代に生きたエレミヤは、神様の御言葉をむさぼり食べた、と言います。

『15:16 あなたの御言葉が見いだされたとき／わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり／わたしの心は喜び躍りました。』

私たちが自分で味わった感動する書物や映画を、自分だけのものとせず、人々に紹介し、分かち合うことが、口から入れる食物同様に大切だと思うのです。

本日の特禱に、「豊かな慈しみをわたしたちに与え、あなたが約束されたものを目指して走り、ついに天の宝にあずかる者としてください、」というのがあります。

本を買ったり、映画のDVDを買ったり、また漬物の材料を手に入れるのに、お金がかかりますが、それによって、自分の財布が少し軽くなれば、天に宝を積むことになるのではないのでしょうか。

マルコの10章に金持ちの男の話がありますが、イエス様は彼にこんなことを言われました。

◆金持ちの男

10:17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」 10:18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。 10:19 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」 10:20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。 10:21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

私たちは、神様によって養われる羊ですが、しかし同時に、「人々に食べ物を与える」という使命を持った弟子でもあることを自覚し、実践するものでありたいと思います。たとえ、国の政治家が自分のことばかり考えるような人々であっても、神様がイエス様を通し、またイエス様が弟子たちを通して人々を養ったように、私たちにもこの国の人々をお互いに養い合い、助け合う使命があるように思えます。そしてそれを目指して歩む時、天の宝にあずかる者になれるように思えるのです。